島根の民話

第五二回

小僧の蜂蜜なめ・隠岐郡海士町御波

令和3年8月3日掲載

収録・解説・酒井董美（ただよし）　イラスト・福本隆男

語り手　浜谷包房さん（昭和3年生まれ）
収録・昭和58年5月29日

あらすじ

昔、和尚さんと小僧さんがあった。小僧さんはとても知恵のめぐりが早いのなんの。

あるとき。和尚さんが見つけられては大変だと思い、小僧にかくれて蜂蜜をなめていたのに見つけられてしまった。

「和尚さん、そりゃ何ですか」。

しまったと思ったが、「これは年寄りがなめると長生きする薬で、わしは時々こうして少しずつなめておるから長生きしているのだ。けれど子どもがなめたならじき死ぬから。これにかなり大変な毒だから、これにかかわるのではないぞ」というので戸棚に入れておいた。

和尚さんがあるとき法事に出た隙に、小僧は「何がそんなバカなことがあるものかい」というので、それをなめたところ、なんと言ってもなの蜂蜜なので、美味しいのなめてしまって、壺にあったやつを全部なめてしまって、「はてな。和尚さんが戻ったならどういうふうに言い訳をすればいいかな」と思っていたところ、茶碗があるので、「よし、この大事にしている茶碗をぶちめいやれ」というので、茶碗を五、六回8投げつけて（壊してしまって、和尚さんが帰ってからシッポカッポ泣いているところだ。

シッポカッポ

で、和尚さんが、「小僧、おまえはどうして泣いているのだ」と聞くと、「やれ、和尚さん。悪いこと」としてしまいました。私は和尚さんが大事にしてた茶碗を壊してしまい、仕方がないので死のうと思って、和尚さんがなめるのをなめたのを、まだ死なれないので、お願いしたください。

「やれな、おまえにはどうもっとくださいしたって勝てぬわいぶと言ってます」と言ったら、

「和尚さんが兜を脱いだということですわ。

解説

語り手の浜谷さんは、元公務員であり、口承文芸に関心の深い方であった。現在93歳という高齢であり、現在でも海士町でながら、この話をうかがったときは、民話と文学の会を牽引している萩坂昇、大島広志両氏を迎えて、隠岐島前高校郷土部の諸君が案内役となり、海士町の民話収録に励んでいたときの収穫だった。

「あらすじ」で共通語化した形でのこの話は、かなり実際は閼海士方言で語られている達なしておいたが、読者の皆様には、QRコードで浜谷さんのすばらしい語りをぜひ味わっていただきたいと思う。

この話、関敬吾『日本昔話大成』では、笑話の巧智譚の中にある「和尚と小僧」の「飴は毒」に戸籍があり、次のように出ている。

和尚は飴（梨・酒・砂糖・金平糖）を毒だといって和尚の小僧に与えない。小僧は和尚の秘蔵の茶碗を割って飴を食う。申し訳に死ぬつもりだがうまくいかない。死ねぬと仲間が語ってくれる。

この話は、関敬吾『日本昔話大成』では、笑話の巧智譚の中にある「和尚と小僧」の「飴は毒」に戸籍があり、次のように出ている。

和尚は飴（梨・酒・砂糖・金平糖）を毒だといって和尚の小僧に与えない。小僧は和尚の秘蔵の茶碗を割って飴を食う。申し訳に死ぬつもりだがうまくいかない。死ねぬと仲間が語ってくれる。

（元島根大学法文学部教授）